感染症発生動向調査委員会報告　1月

≪今月のトピックス≫

- **麻しんは2008年1月から全数把握疾患となりました。市内では100例以上の報告があり、小学校入学前の予防接種（MRワクチン第2期接種）の徹底が望まれます。**
- **インフルエンザは、一旦減少するも、再度増加中です。**

【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点：84か所、内科定点：55か所、眼科定点：15か所、性感染症定点：26か所、基幹（病院）定点：3か所の計183か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症とを報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計139定点から報告されます。

平成19年12月24日から平成20年1月27日まで（平成19年第52週から平成20年第4週まで。ただし、性感染症については平成19年12月分）の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

全数把握の対象

＜麻しん＞

1月から感染症法の5類感染症の全数把握の対象となり、診断した医師すべてに届出が義務付けられました。
（国立感染症研究所ホームページ
http://idsc.nih.go.jp/disease/measles/index.html）

横浜市では、1月31日までの報告数は144例と、全国の中でも非常に多くなっています。年齢別では10代が過半数を占めています。また、半数以上が予防接種未接種でした。2012年麻しん排除に向けて、予防接種の徹底が最も大切です。

横浜市の詳細については、「麻しん（はしか）の流行について」
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2008nen/measles.pdf をご覧ください。

平成19及び20年　週－月日対照表

第52週	12月24～30日
第 1週	12月31～1月6日
第 2週	1月 7～13日
第 3週	1月14～20日
第 4週	1月21～27日

《麻しんの排除に向けて》

① 2008年1月から、風しんとともに全数報告疾患として、発生状況等を詳細に把握。
② 2006年度より、麻しん単独ワクチンの1回接種から、麻しん風しん混合ワクチンによる2回接種に変更。
③ 2008年4月より5年間、中1及び高3相当の年齢への定期接種を実施。

＜レジオネラ症＞

横浜市では、昨年は28例と、前年の4倍の報告がありました。今年も、1月は3例の報告があります。全国では、昨年は660例、今年は第4週までの累計が50例となっています。

循環式浴槽やジャグジーなどをよく利用している異型肺炎患者の場合には、レジオネラ症の検索が重要と考えられます。

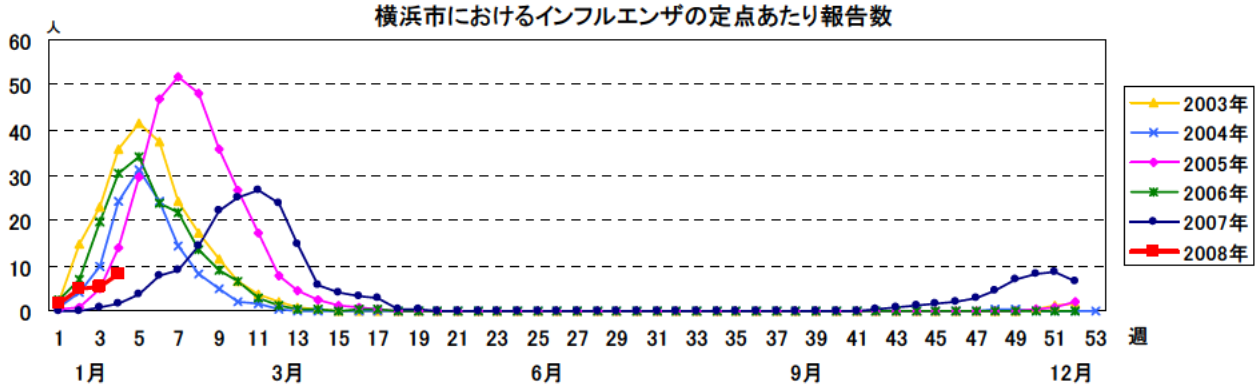
なお、衛生研究所と区福祉保健センターでは、原因究明と感染拡大の防止を目的に喀痰検査や施設調査、遺伝子検査を行っています。

※ その他の疾患については、横浜市感染症発生動向調査全数情報をご覧ください。
http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/report.html#zensu

定点把握の対象

＜インフルエンザ＞

年末年始にかけて、横浜市でも全国と同様に減少しましたが、第2週以降は再び増加し、第4週は定点あたり8.21となっています。区別では、中区以外の17区で流行の目安となる「1.0」を超えており、都筑(17.2)、瀬谷(15.0)、栄(14.2)、磯子(12.7)、泉(11.0)、金沢(10.4)、戸塚(10.3)、港南(10.3)の8区で注意報レベルの「10」を超えています。川崎市は8.74で、横浜市とほぼ同じですが、神奈川県(横浜、川崎を除く)は14.88と高く、注意報レベルの「10」を超えています。



全国的には、ここ数年間は大きな流行が見られなかったAソ連型(AH1)が多く検出されています。横浜市の検査結果では、当初は今シーズンから使用されているワクチンと類似株でしたが、抗原変異したウイルス株が増加しつつあります。

最新の情報については

http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2008nen/sokuhou.pdf をご覧ください。

＜感染性胃腸炎＞

11月後半から増加傾向が続いていましたが、第51週をピークに減少し、第4週は定点当たり8.14でした。

川崎市は9.97とやや横浜市より高めで、神奈川県(横浜、川崎を除く)は8.20でした。

病院、施設等におけるノロウイルス感染の集団発生もあるため、職員の健康管理についても、十分注意を払う必要があります。

＜RSウイルス感染症＞

例年、インフルエンザに先がけて流行が見られます。今シーズンは、インフルエンザの流行がかなり早く始まりましたが、RSウイルス感染症は、例年通り12月に多く報告されていました。1月に入ってからは、第1週が1人、第2週が14人、第3週が13人、第4週が6人と第2週以降は減少傾向です。

病原体定点から採取された検体からは、衛生研究所で、12月に10例、1月に5例が、PCR法で確認されました。うち、12月の1例と1月2例はAソ連型(AH1)インフルエンザとの重複感染でした。

＜A群溶血性レンサ球菌咽頭炎＞

第2週以降増加が続き、第4週は定点当たり1.59と、昨年に次いで高い値になっています。瀬谷(5.3)、都筑(3.8)、栄(3.7)で発生が目立ちます。昨年、一昨年とも、2月～3月にかけて高い値が続きましたので、今後の動向に注意が必要です。

川崎市は2.24と、横浜より高くなっています。神奈川県(横浜、川崎を除く)は1.76でした。

＜性感染症＞

性感染症は、診療科でみると産婦人科系（産婦）の11定点、および泌尿器科・皮膚科系（泌・皮）の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

12月は11月に比べて性器クラミジア感染症が増え、性器ヘルペスウイルス感染症が減りました。また、女性の淋菌感染症が3例ありました。

2007年は2006年と比較して、患者数についてあまり大きな変化はありませんでした。季節性もあまり見られず、また、10代が増えているといった傾向も特に見られません。ここ数年の男性の淋菌感染症の減少傾向は続いています。

【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点：8か所、インフルエンザ（内科）定点：5か所、眼科定点：1か所、基幹（病院）定点：3か所、の計17か所を設定しています。検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

衛生研究所から

＜ウイルス検査＞

2008年1月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点40件（鼻咽頭ぬぐい液）、内科定点15件（鼻咽頭ぬぐい液）、眼科定点1件（結膜ぬぐい液）、基幹定点5件（鼻咽頭ぬぐい液2件、ふん便、髄液、血清各1件）でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は気道炎35人、発熱のみ3人、関節痛1人、口内炎1人、内科定点は関節痛7人、上気道炎4人、発熱のみ4人、眼科定点は流行性角結膜炎1人、基幹定点はインフルエンザ1人、痙攣重積1人でした。

2月8日現在、小児科定点の気道炎患者18人と発熱のみの患者3人と関節痛1人からインフルエンザウイルスAH1型、気道炎患者1人からインフルエンザウイルスAH3型、気道炎患者1人と口内炎患者1人からヘルペスウイルス1型、内科定点の発熱のみの患者4人、気道炎患者3人、関節痛3人からインフルエンザウイルスAH1型が分離されています。これ以外にPCR検査では、小児科定点の気道炎患者3人からRSウイルスの遺伝子が検出されています。また、インフルエンザウイルスAH1型が分離された患者2人からも、RSウイルスの遺伝子が検出されています。眼科定点は、流行性角結膜炎患者1人からアデノウイルスが分離されています。

基幹定点は、インフルエンザ患者1人からインフルエンザウイルスAH1型が分離されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

＜細菌検査＞

1月の感染性胃腸炎関係の受付は8菌株で起因菌は検出されませんでした。溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体の受付は5件でA群溶血性レンサ球菌が3件検出されました。